

## 家康公創建の名刹「佛現山善徳院 随念寺」

随念寺

前住職 村田聖巖



ただいま紹介を頂きました、当寺二十六世前住職、村田聖巖でございます。今日は幸いにも良いお天気に恵まれまして、今まで会った事もないお方とこうして随念寺の本堂でお目に掛かるという事は、私にとって、またお寺にとっても非常に幸せと存じます。それではこれからこのお寺に関わります、松平清康公、それから清康公の姉であるとも妹であるとも聞いております久子の方のお話しをさせていただきます。資料の年表を見て頂きますと清康公の印があります。それから久子の方の印もでございます。いまひとり、このお寺を創建された家康公、それから初代の開山と申します、開山どんよるもん磨訶魯上人、この四方を外してお寺の“江戸香る岡崎”をお話することは出来ないものですから、この四方について順序に追ってお話致したいと思っております。お話の内容と年表と照らし合わせて頂いて、お話を聴聞して頂けると非常に理解が出来るかと思っております。この表題が「江戸が香るふるさと岡崎」になっておりますが、私が取り上げました内容については、先ほど申しましたように、ふさわしくないかとも思いますが、この四方について逐次お話致していきたいと思っております。

### 1. 松平清康公と随念寺

まず、清康公についてお話させていただきます。清康公については昨年10月13日に開催の「岡崎学～岡崎を考える」の一講座の中でもお話がございました。充分その知識と内容についてお持ちの方もあるかとは存じますが、復習のつもりでお聞き下さいませ。

申し上げるまでもなく、およそ497年前の1511年（永正8年）清康公は三河安城で誕生し、幼名を竹千代と申し、父は松平6代信忠公で、23歳でした。安城三郎、又、岡崎に入って世良田次郎三郎と改称しましたが、祖父の松平5代長親は、嫡男信忠より弟の信定を可愛いがられたそうでございます。その為に後に内紛が起こったり、あるいは家臣の評判を悪くし、いわゆる長男、次男二方に別れ、後の災いの火種を作ることになります。これをひとつ頭の中に入れておいて下さいませか。ご承知の方もありますが、清康公は僅か13歳で家督を相続され、松平宗家7代とされました。若年ながらも「仁」、人偏に二の書きまして「仁」に溢れ、武勇に優れた武将の資質を備えておられました。これには父信忠公を暗愚とする裏返しの念もあったのでしょう。時、戦国の世で各地に群雄割拠し、領土の侵食を窺う気配。四面楚歌の騒然たる時でございます。まず清康公は強力な家臣団を引き起こし、まず松平一門の結束掌握、権力の集中化と自らの宗家としての力量の発揮を自分自身に鞭打って努められました。

まず、目の前の邪魔者であった西郷弾正信貞の件でございます。1524年（大永4年）5月に岡崎城、それから山中の砦を支配しておられた西郷弾正信貞は若年の宗家である

清康公を<sup>あなど</sup>侮り命令に服従しなかった。従って大久保忠茂の献策によって清康はこの山中城を風雨の夜中に乗じて攻め降伏させたわけです。信貞は清康の武勇に恐れをなし、娘さんと岡崎城を差し出し、西郷弾正は退隠しました。時期到来とこう定むや来る年来る年も戦闘戦場の明け暮れで、年表の 4 の 1525 年から 5 の 1929 年、来る年も来る年も戦果勝利で<sup>いろど</sup>彩られていった。

そして次に年表の A をご覧頂きますと、1530 年(享禄 3 年)20 歳の時、元日に「是」の字を掌握した初夢を見る。模外和尚に夢判断を請うと、天下人となる予言を頂く。この事については昨年、お話を聞かれ、皆さん方のお耳にまだ残っていることと思いますが、天下を掌握するという夢判断だったのです。これが年表の A になっております。

こちらが清康公のお寺では松平清康公御吉例の真影と呼んでいます。市の美術博物館にありますと松平清康公像と書いてありますが、お寺の記録では、松平清康公御吉例の真影と呼んでいます。後程、この絵についてはお話致しますが、これが享禄 3 年元日に是の字を掌握した肖像画を描かせました。これが伝わり伝わって現在お寺に存続しております。ここで一言お断りしておかなければなりませんのは、今、岡崎市市文化財保護条例が制定されて 50 周年を記念して、岡崎市美術博物館で展示が明日まで行なわれております。このため本物を持っていくことができず、これは大塚工芸で模写をして頂いたレプリカです。よそで本物を写すことは出来ません。お寺の物ですから本物そっくりの物を大塚工芸で制作して頂きました。この清康公のレプリカは安城の博物館と一緒に作りました。これが松平清康公御吉例の真影で、享禄 3 年、20 歳の時に「是」の字を掌握したという肖像画でございます。それから、1530 年(享禄 3 年) 同じく年表 7 の 1531 年から 8 の 1533 年と先ほど申しました年表によりますと、戦勝、戦果、勝利と積み重ねていったわけなんです。このような清康公の果敢な行動は近隣諸国、今川氏、今川氏輝、織田信定、織田信秀による国内統一への布石、軌道を同じくするものであったわけなのです。それにしても松平が少し他の割拠の武将より遅れておりましたので、清康公は<sup>あわ</sup>慌てたんです。これは事実です。戦国大名への道程の第一歩でもありました。

清康公は 1531 年(享禄 4 年) 21 歳より世良田次郎三郎と称す。これは松平氏が西三河一帯に支配権を拡大し、さらに足利一門、今川氏、吉良氏には対抗しうる名家であるという証であり、三河諸領主とは区別される存在であるということ強調するための宣言であったわけなのです。新田源氏一族の世良田を称したのがそのいわれであります。1535 年(天文 4 年) 鴨田にございます大樹寺、2 月 22 日大樹寺の多宝塔の真ん中の柱を建てる儀式である真柱式を済まされております。これは言うまでもなく松平一族の一層の団結と一歩遅れていた松平家の大衆の信望の昂揚と武運長久の極み一切を込めて多宝塔を建立に掛けられたと思われます。尚、庶民の民主化、譜代の家臣団の組織化、岡崎五人衆、代官という直轄領の農民の支配機構の整備、これがうまくいかなければ、幾ら戦いで勝っても戦費がかさみます。部下それぞれに与えるものが必要だったのです。従ってここに目を付けられまして、農民の支配機構の整備、城下町の形成などを進めて

いったわけです。年表の 10、1535年(天文4年)12月5日、織田信秀に戦いを挑み、尾張守山に出陣しておられました清康公は、家臣の阿部弥七郎親子によって刺殺され、年僅か25歳の生涯を終えられました。世にこれを「守山崩れ」と称します。嫡男廣忠公はまだ10歳であったわけなんです。織田信秀は、これは好機とばかり岡崎城へ攻め入ってきました。松平勢の決死の守りによって、井田でこれを撃ち退けました。兵は一旦引き上げて行きましたが、先ほど申しました松平一族の中で思わしくないことが起こりました。かつて6代信忠と家督を争った桜井領主信定は10歳の廣忠を追放して岡崎に入城してしまったんです。これから廣忠公は伊勢、遠州、三河と暫く流浪の身になるわけなんです。清康の10年間の連戦戦果も全て瓦解化となってしまいました。織田方の攻撃と松平家の内紛によって清康公の遺体は密かに運ぶことしか出来なかったのです。本来は大樹寺へお運びするのが筋であったわけなんです、それは桜井領主信定が宗家の子供である廣忠を追放してしまったので大樹寺に入れなかった。ですからその遺体は巡り巡って密かに菅生丸山に運び茶毘に伏したわけなんです。この戒名が善徳院殿年叟道甫大居士と申します。清康公は2度語りますけれども10年間、連戦連勝であったにも関わらず急いでおられた。そして周囲を見渡せば、松平よりも二歩も先に先じている。だから急がれた。この「守山崩れ」については色んな異説がございます。

ではこの清康公の画像に戻ります。ここに年叟道甫居士とあります。院殿がございません。亡くなってから画かれたものであれば(学者はこの肖像画は清康公が亡くなってから出来たんだろうという説もあります)善徳院と出ているはずなんです。ここには年叟道甫居士と出ているだけです。今ひとつここに賛がございます。自然相和 微妙宮商 出五音聲 清風時發、四字一句の四行がございます。これは仏説無量寿経の中にございます一節です。清康公はこの字句を非常に大切に自分の目標としておられたのです。ただし、私は今反対に読みました。清風時發 出五音聲 微妙宮商 自然相和と読みます。そうするとここに清がございます。一番最後に相和の和がございます。清康公はいわゆる松平を治めるには和が必要だと。この賛を非常にお喜びになって自分自身もこれを目標にしておられた。じゃあ内容は何が書いてあるんだという方がおられるかと思いますが、仏説無量寿経、上巻の中の五分四半程の後にございます。それは清風時に発して五音の声を出す。微妙の宮商自然に相和とあります。これは極楽浄土の音楽、自然の音を表現しているわけなんです。清康公は戦争は好まれなかった。大嫌いだったと思います。この賛を見ますと。そしてこれと同じような句が仏説阿弥陀経の中にございます。じゃあこの御装束はどんなお姿かと申しますと、立葵の紋所が付いております。この袴にも立葵の紋が付いております。この君は小柄にして百濟鳥クナラチヨウ鷹の目の様に爛爛としておった。ことに弓矢の道で上に立つものはなかった。御心優しく、慈悲深く、お情け深い、上段畳の上に白地に格子の筋が入っています。縞の着物を着ておられ、丸の内に立葵を入ったあさきぬ色の肩衣、そして長袴を着けておられる。刀を仕込んでおられる。腰に差しておられる。そして右手には扇子を握り、左手には数珠を持っておいでになる。この左手の数珠をもっておられる手の中が是の字ということで、この肖像画をご理解頂

けたら結構かと思います。松平はどれほどの枝葉があったんだろう。松平庶家としても14家あったわけなんです。それは親氏、泰親、信光と代を重ねる度に親戚がどんどん増えていった。それが14家あったわけですから、14家を統率する13歳の清康が統率することは並大抵ではなかったということがわかりだと思えます。

## 2. 久子の方と隨念寺

それでは次に久子の方についてお話したいと思います。最初に、300年ほど戻ったお話をいたします。旧東海道五十三次は言うまでもない、岡崎は38番であります。38番の絵には矢作橋が載っております。岡崎で一番賑わったのはどこであるか、伝馬です。岡崎伝馬としか出ておりません。岡崎の宿場と駅としては矢作橋が出ております。この伝馬が上伝馬、中伝馬、下伝馬と続いておりますが、この伝馬から久子の御廟までの案内をしたいと思えます。

書くのも年表もよそに置いておいてちょっと目を瞑って頂いて聞いて下さいますか。下伝馬から小高い丘、菅生丸山の方向に細い路地が門前通、門前屋敷と言いました。両側とも石屋職人が軒先を連ね、鑿と金槌を石を叩く音を聞き、間口の狭い餅屋だとか下駄屋、足袋屋の小商い通りを過ぎ、その奥、石段に上がる前に右側に馬場、馬を繋ぐ所。厠、用を足す。埃を払って総門をくぐるわけなんです、総門をくぐりますと、今は鎮守堂があります。そこに番屋がありました。一般にはその時分入れません。番屋の許可を得てその参道に入るわけであり、この総門は三河一向一揆の折に家康公が破却して当時に土産として寄進されたと。その寄進された総門は大戦の戦火で焼失しました。その時一緒に頂いたものがこちらの今お地蔵尊の台になっていて須弥壇と申します。銀泊になっています。この2点目、3点目は奥の方に開けてあります。黄色い風呂敷のようなものが下がっています。その向こうにこの本證寺からぶん取って参りました、内陣の金柱、それが上の虹梁、これをこのお寺に寄付したんです。この3点。こちらは松平家の御霊室と読みます。魂の部屋、この御霊室の真後ろに御廟所がございます。ちょっとこれを加えさせて頂いて。総門をくぐりました。その両側に石礎、石を基礎にして石を立ち上げてあります。白塗りの土塀、風格のある趣の佇まい、清楚な感覚が伝わってきます。土塀越しには右には魯方院、撰取院、左手の方には授徳院、常福院の門中の四ヶ寺が屋根の重なりを眺めながら参道を進みます。正面に六脚の楼門、左右の五段石礎、白土塀、左右の高さと幅が微妙に違います。それに気付かれた方は恐らくないと思えます。これを私がここへ参りまして二度修理いたしました時に、そのまま残して欲しいということでそのまま残っておりますが、西側が幾分東側に比べて高くなっているんです。そして西側の方が幅が広がっているんです。東側の方が華奢に出来ています。これは何故か。やはり美的な姿、目に判らないけどそれは雌雄を表現、陰陽を表している。大自然を凝縮した表現、これは素晴らしいことと思えます。そのまま継承して土塀を修理しました。石段を登る前にこの重量感のある、何と贅沢な石垣をしてあるか。こんなお寺でありながらと反発をもたれる方もあると思えます。私も最初そう

思いました。誰がこんな立派な石垣にしたんだ。これは先ほど話しにございましたように、岡崎城の東出城としての役目を果たす。頑固なものでそして重量感のある贅沢と思われながらもやはり強固なもの。いわゆる城壁をおわせる石垣でございます。そして石段が24段ございますが、24段の石幅、高さ、案外低いんです。奥幅はあります。どうしてこんな石段になるのか。登って来られるとどうも足運びがちぐはぐになると思われた方もあると思いますが、それはこの24段は、御駕籠が道中は頭と尾がございます。階段を登る時に駕籠がこうして登って行ったら中のご立派なお侍さんは非常に居づらい。だからその階段が駕籠のまま横になって登れるように出来ているんです。だからこの階段はどこを見られても類例が少のうございます。そしてこの辺の素晴らしさというのは一度よく、またお暇な時にお越し下さってご覧になったら良いかと思いますが、そうした石段が24段ございます。モダンで素晴らしい形態で整っております。そして楼門をくぐります。楼門は二代将軍が御寄進です。久子の50回忌の法要にこの本堂と同時に仕上がっております。元和年間です。およそ400年になります。楼門をくぐりまして右側に本堂。九間半、間口、奥行き九間、正面左右に三面の外縁、内側には内縁がございます。内縁はことごとく驚張りになっております。そして中央、この楼門の正面です。中央には唐破風を備えた大玄関、二間半、これは岡崎では見ることがございません。二間半の玄関と言うのは先ほどお話ししたように、お駕籠が横付けになるように二間半の大玄関が必要なんです。やはりそれだけ、ここにおいでになった方に対する敬意を表している姿だと思いますが、そうした大玄関、そしてその奥に大方丈がございます。大方丈は九間の七間半、上段の間能舞台を備えております。右に本坊、お庫裏と申しまして、本坊というのは下に四ヶ寺がございますから、四ヶ寺に対しての坊とこう申します。これが八間の十一間あります。土間が奥行き三間ございます。土間は他寺の庫裡へ参りますとコンクリートが打ってあったり、石が貼ってあります。当山の土門は昔のまま。地獄土間と言います。やはりこれは夏冬物を保たせるには土間が良いということを知っておりますが、そのままにしてあります。板縁が4間ございます。お庫裏の土間に入られて上を見上げられると大小の梁、隅木、桔木、垂木、野垂木こういったものが天井が張らないことによりまともに見えます。これはお城造りの姿と変わりありません。このお庫裏の荘重な豪華さは表現しているのは先ほどの石段を上がられると同時に、このお寺の力をいわゆる見せつけたというか、驕りのような気がして私も幾分心苦しいところがございますけれども、そうした表現がしてあります。その次に本堂の前を通りまして、本堂と経堂の間を進むと石垣、これは弧を描いたように反り上がっております。この石垣は岡崎の大手門を造る時に原型はこの御廟の石垣が大手門に移された。この白い土塀を登りますと、2段によって囲まれた石段が25段ございます。登り詰めると一の門、ここは歴代住職の里坊の碑があります。鉤形にまた登りまして15段登り、二の門をくぐりますと御廟です。南向きに本堂のこの御霊室の真後ろに当たります。玉垣をしつらえ、石の灯籠を一对備え、右に清康公、左に久子いわゆる善徳院と隨念院の御廟がございます。兄、妹それぞれの生涯を終えてお互いの会話が聞こえてくるような気が

します。幾分小振りな宝篋印塔でありますけれども、石そのものはお墓は鳳来寺山の靈石で宝篋印塔が出来ております。お墓というのは靈石を使う習わしになっております。そうしたものが教えてもらえるような気がいたします。御廟からの眺め、当時言うまでもなく一般民家は屋根が低い。屋根越しに東海道の筋も見えそうである。また東南の方には神馬崎の小高い丘を旅人が行き交うのが見えるよう。南西には岡崎城を眺め、さらに先見すれば反り上がりの矢作橋も目に映るようではなかったろうかと思えます。これが清康公、久子の御廟までのご案内でございます。この御廟は明治5年に廃藩置県とともに全部御廟は国有になりました。ところが平成5年何とかして戻したいということで、市へ懇願したけれども払い下げは出来ませんでした。漸く平成15年2月23日に市から買い上げる事が出来ました。だから一般の方に入ってもらっては困りますとお断りして書いてあります。こうした難儀な時代を通過しております。言うまでもなく、この本堂だけになって明治の時にはお庫裏も大方丈も総門も山門も全部取り上げられました。

次に久子。年表1です。大給城主松平乗勝公に久子はお嫁にお行きになさります。その乗勝公の間にお生まれになられたのが親乗公。ゆくゆくは西尾城主の継統を敷かれます。1525年(大永4年)11月20日、乗勝公は29歳で亡くなります。亡くなるとまだ若い久子は親乗公を大給に置いて岡崎城に帰られます。1525年(大永5年)5月2日、兄の清康公が足助城主鈴木重政を責め、主従の関係を結び、同年12月久子を足助に送って重政の嫡男鈴木重直と再婚させます。させられたんでしょうね恐らく。久子は乗勝が亡くなってまだ1年と少ししか経っていないところに、また足助の鈴木重直のところにお嫁にお行きになる。戦国時代の政略結婚は利害を打算から割り出したものが多いから姻戚関係が結ばれたからといってもあてにならないことが珍しくない。再婚した先での生活は安定したものではなかった。1535年、先ほど言いました清康公の時に12月5日「守山崩れ」で清康公は殺害されます。三河の不安定な松平の動揺は大きく衆心の一致しない間に足助の鈴木重直は松平に背いた為に久子は余儀なく岡崎に帰ることになります。10年間の歳月、お子さんはあった記録は見えておりません。何と清康公の連年連戦と久子の足助に行かれて10年間の身、表裏の街道の想像をする時に脳裏を熱くなるような気がします。1544年(天文13年)年表の5でございます。廣忠公の正室於大の方が松平家より離別され刈屋に帰られます。1547年(天文16年)8月、家康公が3歳から6歳の間、久子が竹千代の養育に携わることになるわけです。幼少の時はもっとも多感で吸収力の旺盛な時期であります。1年が3年に匹敵する最盛期です。久子は竹千代の変容を大事に受け止められたことでしょう。母同然の愛育の3年間であった。久子は、大給松平家に残した我が子親乗、ゆくゆくは西尾の城主になるわけですが、幼い竹千代をダブらせ深い愛情を注がれたでしょう。久子のうたかたは断言出来ませんが、和歌にこんなのがあります。

「母亡きと 思えば悲し 母思い慕ふを見れば 心たのしむ」

これは時間があたらひとつ詠ってみたいと思いますが、その後、尾張の織田家、今川家の人質生活が始まります。家康公が8歳の時と15歳の時、2回岡崎に帰っておられ

るようでございますが、喜び合い久子と家康公は対面されたことだと思います。今川義元亡き後、家康公が岡崎に戻った後、共に喜び暮らされたのはわずか1ヶ月。年表6の1561年(永禄4年)8月2日岡崎城内で逝去されます。年48歳でこの世を去られます。家康公は20歳でした。遺言によって26年前兄清康公を茶毘にした菅生丸山において同様に自分もそのようにして欲しいと。その霊廟を建て、そして兄清康公と私である久子の供養追善の為に、一ヶ寺を建立して欲しいと遺言でした。1562年(永禄5年)家康は1周忌までに新寺の開基となって本間治郎三郎作入道覚栄を奉行として、城内の久子の居宅それから倉庫をこちらに移築されて、このお寺が出来上がるのが1562年およそ447年くらいになりますか。法名は隨念院殿桂室泰栄大禅定尼とあります。この久子の所持しておられた梶子文堆朱香合を今日お見せしようと思いましたが、先ほどお話ししたように市美術博物館に明日まで展示になっていますから、持ち帰ることは出来ませんでした。その代わりに、久子のお位牌を正面に安置しております。これが445年ほど前のお位牌でございます。立派なものです。当寺創建時に清康公の画像と梶子の文様堆朱香合と久子が愛用しておられました違い棚の小袋棚、小方丈に組み込まれております。この梶子の表面に大きな一輪の梶子の花を本地に深く彫り下げ、表した彫漆の香合であります。木地の上に朱と黒と黄、三色塗り合わせて、なんと100回から150回それに梶子の文を彫り込んでおります。深さが6ミリあります。ちなみに誰の作か。中国の揚茂作とあります。どうして中国の著名な工芸家の作品がこの時分に家康公まだ21歳、所持しておられたか。このことから、ある程度のお力をお持ちだったということが理解出来るかと思えます。今日は清康公と久子の二方しかお話が出来ませんでしたけれども、家康公、当寺開山<sup>どんよ</sup>曆譽上人に就いてはいづれかの機会に譲りまして、最後に先ほどの和歌をもう一度読み上げます。「母亡きと 思えば悲し 母思い慕ふを見れば 心たのしむ」又の出会いを楽しみに、失礼いたしました。